

小麦新品種「さとのそら」の高品質・多収栽培方法

利用対象：小麦の生産農家

○課題の背景

「農林 61 号」～作付面積は約 2 割（平成 24 年産）

- ・コムギ縮萎縮病に弱い。・倒れやすく、肥料をあまり施用ができないので低収。



(生産者からの要望) 生産性の高い品種への転換

(実需者からの要望) 「農林 61 号」と同程度のアミロース含量で加工適性の高い品種



代替品種として有望な「さとのそら」を高品質・多収に栽培する方法を明らかにしました。

○成果の内容

【播種時期】

11月中旬が最適

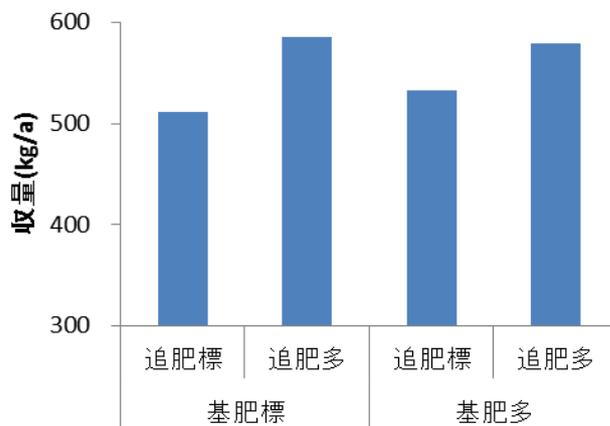
- ・早播きすると穂数不足により収量が低下します。また、蛋白質含有率も低くなります。
- ・播種時期が遅れると成熟期が遅くなり、収穫が梅雨と重なるリスクが高まります。

| 播種時期 | 成熟期 | 収量 | 穂数 | 蛋白質含有率 |
|-------|------|----------|---------------------|--------|
| | (月日) | (kg/10a) | (本/m ²) | (%) |
| 10月下旬 | 5/30 | 364 | 366 | 8.0 |
| 11月中旬 | 6/3 | 423 | 417 | 8.5 |
| 12月上旬 | 6/8 | 436 | 438 | 9.2 |

【施肥方法】

基肥窒素量：7kg/10 アール、追肥窒素量：幼穂形成期と止葉抽出始期に各 3kg/10a

- ・基肥より追肥を増やすことで多収となります。
- ・いずれの施肥体系でも倒伏の発生はほとんど認められません。



○本技術の導入効果

単収向上（「さとのそら」の反収目標:350kg/10 アール）

→ 生産農家の所得向上、実需者への安定供給

1. 背景とこれまでの課題

本県産小麦は、日本麺などの最終製品との結びつきが進み、需要が伸びています。実需からはさらなる増産が求められており、生産面積の拡大や単収向上技術の開発が急務となっています。一方、平成23年度に奨励（認定）品種に採用した「さとのそら」は、コムギ縮萎縮病に対して抵抗性があり、罹病性の「農林61号」の代替品種として現地での作付けが進んでいます。そこで、「さとのそら」への品種転換を進めていく上で、高収量・高品質とするための栽培方法を明らかにしました。

2. 成果の概要

- (1) 播種時期は成熟期、収量および原麦蛋白質含有率から判断して11月中旬が適します。10月下旬播種では穂数が少なく低収となり、原麦蛋白質含有率も低くなります。一方、12月上旬播種では11月中旬播種と比較して、収量は同等ですが、成熟期が遅くなり、収穫時期が梅雨（平年の梅雨入時期：6月10日頃）と重なるリスクが高まります。
- (2) 穂数型の品種であるため、多収とするためには穂数の確保が重要です。一方、分けつは「農林61号」や「あやひかり」と比較して旺盛であることから、穂数を確保するためには有効茎歩合を高めるような肥培管理が有効です。
- (3) 多収とするためには基肥より追肥の増量が有効です。追肥量を増やすことで穂数が顕著に多くなり、また千粒重が大きくなります。基肥として窒素成分で7kg/10アール、追肥は幼穂形成期と止葉抽出始期に各3kg/10アール施用します。

3. 成果の慣行技術への適合性と経済効果

- (1) これまで「農林61号」を作付していた地域に導入することで、単収が向上し小麦生産農家の所得向上につながります。
- (2) 実需者からの増産要望に対応できます。

4. 普及上の留意点

- (1) 作付け前に土壌診断を実施し、石灰資材や堆肥利用による土づくりに努めます。
- (2) 深播きすると苗立率が低下する場合がありますため、播種深度は「あやひかり」と同等の3~4cmとやや浅播きにします。
- (3) 容積重や蛋白質含有率が比較的あがりにくい品種であることから、今後は肥効調節型肥料の利用等について検討する必要があります。

| | | | |
|---------|----------------------------------|--------------|------------------------------------|
| お問い合わせ先 | 三重県農業研究所農産研究課 三重県中央農業改良普及センター | 榎田泰宏 小倉 卓 | 電話：0598-42-6359 電話：0598-42-6323 |
| 参考になる資料 | | | |
| 研究実施予算 | 県単（原種及び奨励品種決定調査事業、麦大豆フードチェーン） | | |